



Claire WOOD,

Dickens and the Business of Death

(x+225 頁, Cambridge: Cambridge University Press,
2015 年, 本体価格 \$ 95.00)

ISBN: 978-1-107-09863-3

(評) 小宮彩加
Ayaka KOMIYA

10 年ほど前に北ヨークシャーの海辺の街、ウィットビーを訪れたことがある。ここは、棺桶に入ったドラキュラの船がついた街として知られているが、崖の上の修道院跡や荒涼とした海を眺めていると、本当にドラキュラが出てきそうな気がする雰囲気の街である。ウィットビーはジェット (黒玉) という黒い宝石の産地としても有名で、街の中心部にはジェット専門の宝石店がいくつも立ち並んでいたのを記憶している。このジェットは、19 世紀に服費用ジュエリーとして人気があり、ヴィクトリア女王もアルバート公が亡くなった後いつも身につけていたということである。服費用の宝石が人気があり、そのおかげもあってヴィクトリア朝時代にウィットビーは観光地として栄えていた、と市内観光の際に聞いて、本来厳粛さが伴う服喪とそのためのジュエリーの流行というのがどこか腑に落ちない感じがしていたのだが、本書を読んだことで理解できるようになった。ジェットのほかに、クレープ地を使った黒いドレス、黒い縁取りのしてある便箋や封筒から、服費用ティーポットや服費用針山に至るまで、ヴィクトリア朝時代というのは、様々な服費用グッズがあり、死に関連するビジネスが繁盛した時代だったのである。それは死が身近なものだったことも意味する。1839 年にエドウィン・チャドウィック (Edwin Chadwick) が出した数値によると、当時の平均寿命は 31 歳だった。特に死亡率の高かった幼児を除いて算出すると平均寿命は男女とも 39.9 歳に上がるそうだが、いずれにしても生きることがとても困難な時代であったことが容易に想像つく。

そのような時代に生きたディケンズの作品にも多くの死が描かれている。『オリバー・ツイスト』はオリバーの母親の出産時の死に始まるし、ナンシーやビル・サイクスの死に様は強烈である。『骨董屋』ではリトル・ネルの感傷的な死の場面やクイルプの溺死が描かれ、『荒涼館』の中では自然発火で焼死するクルックなど忘れがたい死が数多くある。アンドリュー・サンダース (Andrew

Sanders) は著書 *Charles Dickens: Resurrectionist* (1982) において、ディケンズの作品中の死を彼自身の個人的な死の体験やそれまでの文学に描かれていた死と重ねて分析していたのだが、本書の著者クレア・ウッド (Claire Wood) は、当時の死につきものだった商業的視点の欠如が不自然だと指摘し、ヴィクトリア朝時代の死に関連するビジネスとの関わりでディケンズ作品を分析しているのだ。

本書は序章、第1〜4章、そして結論から成る。序章でウッドは、自身の研究を1832年から始めることの意義を説明している。1832年にはディケンズは速記記者として国会の議事を報道していたが、その国会では解剖法が可決され、救貧院や病院で死亡し、引き取り手のない遺体は、医学校に回されて死体解剖に利用することが可能になった。それ以前は解剖のための死体が高額で取引されていたので、死体盗掘が頻繁に行われていたのだが、解剖法を機に死体ビジネスに異変が生じたというのである。ディケンズは、自らを“Resurrectionist”，すなわち「死体盗掘者」と自虐的に述べることがあったが、ウッドもいうように、死体を描いて利益を得る小説家は、実際の死体盗掘者と共通しているところがあるのかもしれない。

第1章“Profitable Undertakings and Deathly Business”では、当時の死に関連するビジネスを概観している。1852年11月18日には、ウェリントン公爵の国葬が盛大に行われたが、それに便乗して「ウェリントン公爵葬式ワイン」や「ウェリントン公爵葬式ケーキ」などが発売されたそうだ。葬祭文化の最盛期は1851年の大英博覧会以降の消費文化の成長期と重なっており、消費の性格が大変強かったという。ディケンズはこのような状況について“Trading in Death”という記事を書き、死を商品化する不謹慎さへの嫌悪を露わにしていたという。本章では、「葬儀用品店」、「墓地」、「死体保管所 (モルグ)」、「蠟人形」、「死刑」などの項目に分けて死の関連ビジネスを紹介しており、それぞれについて当時の状況と、*Household Words* などから読み取れるディケンズの考えを紹介している。また、ディケンズの作品に出てくる葬儀屋や墓堀男などの描写を考察し、それらがジャーナリズムから読み取れるディケンズの批判的態度とは異なる同情的描写であることから、ディケンズのアンビバレンスを指摘している。それにしても、この章で紹介されている“Jay’s General Mourning Warehouse”という店の当時の大繁盛ぶりには驚く。急な葬式があっても、喪服でもショールでも葬儀に参列する際に必要なものが何でも揃う葬儀用品の百貨店のようなところなのだが、リージェント・ストリートの243番地から251番地という、現在ではアップル・ストアやフレンチ・コネクションなどの人気店が並んでいるあたりの一等地に大きな店舗を構えていたそうである。

第2章、第3章、第4章では、それぞれ『骨董屋』、『荒涼館』、『互いの友』を

取り上げている。第2章“Revaluing *The Old Curiosity Shop*”では、ディケンズが描いた子供の死として重要な最初の例であるネルの死が出てくる『骨董屋』について、死から利益を得ることに対してのディケンズのアンビバレントな感情が最も表れている作品だという。そして最終的には1865年の*All the Year Round*のクリスマス号に掲載された“*Doctor Marigold’s Prescriptions*”の考察につなげ、ここには『骨董屋』に顕著だった、死の商品価値に対する不満は影をひそめているとしている。時が経つうちにディケンズの姿勢にも変化が見られ、「死は市場から切り離すことはできないが、感傷的な死が個人や社会に有益な影響をもたらすことに変わりはない」(97頁)と思うようになったようだ」と解釈している。つまり、死は商品化されても貨幣上の価値だけに成り下がることはなく、商品化された死によって表現されるペーソス、怒り、ユーモアは、読者の感情や行動に影響を与えるという結論にディケンズは達したと述べている。

第3章“*Death and Property in Bleak House*”では、財産と死が2つの大きな主題となっている『荒涼館』を扱っている。『荒涼館』が書かれる前の10年間に、ロンドンでは人口増加とともに死体が増え続けて埋葬場所が問題となっていたことを解消するために、ケンザル・グリーン、ハイゲート、アブニー・パークなどの公園墓地が造られたそうだが、『荒涼館』には墓地との連想がしばしば用いられているという。たとえば、クルックの店は不要な司法文書が溜まる埋葬場所のようなどころとして描かれているし、ケンジ・アンド・カーボイは教会跡地に建っており、周りには墓石がある。司法職については“*ridiculous Sexton[s], digging graves for the merits of causes*”と書かれるなどとしており、葬儀屋や墓堀人と重ねあわされているという(110頁)。章の後半では、死を悼むための品物が取り上げられている。

第4章“*Parts and Partings in Our Mutual Friend*”で扱う『共通の友』は、男がテムズ河で死体を探している場面から始まっているように、作品全体に死が影を落としている。著者は、まずディケンズが付した「後記」に注目する。この中でディケンズは、読者に別れを告げ、小説の最後に書いたような“*The End*”が自らの人生にも書かれる日がくることを予見している。これは1865年にステイプルハースト鉄道事故に遭遇し、死んで行く乗客を目にしたために、自らの死も意識するようになったためと考えられる。この後はParting(別れ)とPart(部分)というキーワードで作品分析がされていく。当時の死体解剖に反対する声では、体が分割されることで肉体と魂の完全さが失われ、復活/再生できなくなると主張されていたのだが、『共通の友』では、体の一部を失い、完全性を欠いているのは死者ではなく、生きている者であるという指摘がおもしろい。そして、一見大した意味もなさそうな製紙工場が、死からの再生の場として非常に重要である、

という独特の論が展開される。ディケンズの初期の共著の記事に“A Paper-Mill” (1850) というのがあり、ウッドはそれを丁寧に読むことで、ディケンズにとって製紙工場はボロや紙くずから紙を再生する肯定的な意味を持つ場所である、と論じている。そして、『共通の友』の中でベティ・ヒグデンが辿りつき、穏やかな最期を迎える場所が製紙工場であることの正しさを指摘するのである。

最終章の「結論」では、ディケンズ自身が死後どのように商品化されてきたかを辿っている。ディケンズは遺書の中で、シンプルに名前だけを彫った墓を建てて、記念碑や銅像などは造らずに作品によってのみ自分のことを記憶しておいて欲しいと書いていたのだが、どんなに細かい指示を遺しておいても、それが意図通りに解釈されなかったり、守られなかったりすることもよくあり、死後の運命までコントロールすることは不可能だったようだ。2012年には、ディケンズ生誕100年を記念する様々な祝賀イベントが行われ、いろいろな形で死後の商品化がなされたが、こういった一連の新しいメディアや新しいコンテキストでの作品解釈は、ディケンズが今でも生命力を持つ重要な存在であることを示しているというのだ。死は終わりではなく、新しい旅の始まりなのだ。

本書はジリアン・ピアを編集長に据えた“Cambridge Studies in Nineteenth-century Literature and Culture”という19世紀の学際的研究シリーズの中の一冊として今春出版されたものである。「ディケンズと死のビジネス」という、ややブラックで不謹慎なタイトルに魅かれ、刺激的な内容を期待して読み始めたのだが、実際に読んでみたらそれほど刺激的でもなかったというのが率直な感想である。なんといっても、文体が息苦しいものだった。段落を分けた方が良いところでも区切らず、わざわざ小難しい表現を使い、作品からの重要そうな箇所そのまま引用せず分解し、文章に組み込み長々と読ませようとしているので、読んでいて息継ぎができないのだ。同じ引用が何か所で繰り返し使われていたり、やや強引でこじ付けに近い解釈があったりして納得がいかないところもあった。著者のウッドが大いに参考にし、特に第1章については論が重なる部分が多々あると認めているキャサリン・ウォーターズ (Catherine Waters) による記事, “Materializing Mourning: Dickens, Funerals and Epitaphs” にも目を通したのだが、こちらの方がスッと頭に入ってきた。「ディケンズと死」について特に関心がある読者であれば別なのかもしれないが、タイトルやテーマが魅力的であるのに、残念ながら誰にでも読みやすいものではない。ディケンズ研究を始めたばかりの学生にはあまり薦められない研究書といえるかもしれない。